

## 旧約聖書を読んで感じること(24) 民数記「民の反逆と祭司のとりなし」



契約の箱 アーシュ大聖堂 フランス

異民族と戦わなければならないのに、内部で権力闘争が起こりました。モーセと同じレビ人で、幕屋の祭具を守る任務があったケハト族のコーが反逆しました。かなりの数の指導者を仲間に入れ、徒党を組みました。アロン一族の主導権独占に不満を抱いたのです。それは同じレビ族でも、差別があったし、祭具を運搬する時、ケハト族には牛車が与えられず、担いでいかなければならない不満もあったのではないのでしょうか。それに対しモーセは

主は明日の朝、主に属する者、聖とされる者を示して、その人を御自身のもとに近づけられる。すなわち、主のお選びになる者を御自身のもとに近づけられる。(民 16:5)

と結論を神に委ねたとあります。モーセは「神が選ばれた者が祭司である」と決して譲りません。次の日、反逆者たちは、足元の大地が裂けて飲み込まれたという惨事で滅ぼされます。民の恐れ、疲弊、不平はまた膨れ上がりました。神の怒りは疫病となって民を襲いました。祭司アロンは民の罪を贖う儀式を急いで行い、神に民をとりなし、反逆は治まりました。その後、神は、祭司職は嗣業の土地を持たない「無欲の清廉潔白の職」であるべきだと示されました。



バアル神

彼らがモアブの平野に宿営した時のことです。この時モアブの王バラクはミディアン族と同盟を組んで、イスラエルと対峙していました。ここで民はモアブの娘たちに魅了され、従うようになりました。娘たちは自分たちの神々に犠牲を捧げる時に、民を招き、民はその食事に加わって娘たちの神々を拝んだのです。

「私をおいてほかに神があってはならない」(出 20:3)という第一の戒めがこのように、民の弱い心によって破られることは、イスラエルには最大の恥辱だったのです。モーセとイスラエルの人々の共同体全体が臨在の幕屋の入り口で嘆いている

目の前に、シメオン族の一人、指導者でもあったジムリがミディアン人の女性を連れて宿営に入って来て、奥の部屋まで行きました。アロンの孫、祭司ピネハスはそれを見ると、立ち上がって二人を追い、ジムリとその女性を槍で共に突き殺したと記されています。この女性はミディアンの部族の長であるツルの娘コズビであると名前も記されています。有力者の娘も絡んでいることであり、これは、モアブ王バラクが女性達を



ピネハス Jan Sadeler, the Elder

そそのかし、イスラエルを打ち負かす戦術であったとモーセは知り、「ミディアンに対する復讐」の名のもとに、戦いが始まりました。この戦いに勝利しましたが、イスラエルも多くの損害、災害を受けて、最大の惨事となりました。イスラエルにとって

は最悪の罪でしたが、祭司ピネハスはジムリとコズビへの制裁、裁きを徹底しても、イスラエルの民を罰することは避けました。そのため神はピネハスを平和の祭司として祝福しました。

見よ、わたしは彼にわたしの平和の契約を授ける。

彼と彼に続く子孫は、永遠の祭司職の契約にあずかる。

彼がその神に対する熱情を表し、イスラエルの人々のために、罪の贖いをしたからである。(民 25:12)



アシェラ神